

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは黄色の解答用紙に書きなさい。字数の指定のある問題は、句読点も一字と数えます。

そろそろさみだれの季節がやって来る。

同じく雨ではあっても、ふしぎに季節や環境によつてその感じは非常にちがっている。それでわが国では雨にいろいろな名まえがつけられている。春さめ、さみだれ、しぐれ、驟雨、ゆうだち、霧雨、小糠雨、その外にもなおあるであろう。そういう雨のいろいろな感じのなかには、雨の音がかなりな役目をはたしている。さみだれの静かに降りそそぐ音とか、ゆうだちの激しくものを撃つ音とか、音もなくひつそりと濡らしてゆく小糠雨とか、みんなそれぞれの趣をそなえているのである。

1 ものしずかに雨の音を聞いていると、いろいろな記憶が心のなかによみがえってくるのも、一つのなつかしい風情である。

2 ところで、ちよつと見方を変えて、雨というのはたくさん水粒が空から生まれて、地上に落ちて来るものだと考え出すと、あたかもそれらが人間の運命を象徴しているようにも思われる。こういう水の粒にもいろいろの「注1」大きいものがある。眼で見ると、雨は普通に細い線につながって見える。雨の落ちるのはそんなに速いのではないが、それでも人間の眼はその粒を見分けるわけにはゆかない。

そこで雨粒の大きさを測るのにはどうしたらよいか。気象学では、そのためにちよつとおもしろい方法をつかっている。それは雨粒の落ちるのを吸取紙で受けて、紙の上になじみ拡がる面積を測るのである。それから別にハンケイのわかっている水粒を同質の吸取紙ににじませてその面積を雨の場合と比較すれば、これから雨粒の大きさを知ることができようというのである。

この方法は科学的にはさほどセイミツだとはいいがたいが、雨粒の大きさなどは個々にそれほどセイミツに知る必要はないのであるし、大体の平均がわかればよいので、これでも十分に間に合うのである。私がそれをおもしろいというのは、雨が何事もなく落ちていて人間は、人間の眼でその大きさなどはつきりとわからないのに、紙で受けるとそれがはつきり見えるようになるということである。生きているうちはさほどとも思われぬ人間が死ぬと急にその偉さが世間に認められるということなども、3 これと似ている。

すべての事はこれと同じである。たいした変わり方もなく続いている間は、そういう事があると承知していながら、人間はとかくぼんやりと見過ごすだけである。そしてそこに何かの事変が起こると、はじめてその正体を認めて、今さらのようにあわて驚くことすらある。また病気などの場合でも、身体のかなかに潜んでいる間は、「a」自分で承知していても、まあ、どうにかやってゆくと、たいして気にも留めずにいるが、それが何かの反応を起こすようになると、これではならぬと、今さらその重大さを気にするようになる。これらは4 人間の通性で仕方のない事だといってしまうと、それまでである。

5 しかし、事の起こらない先にその赴くところをはつきりと見究めることこそ、社会や人生や、その他すべての仕事にとってどれほど大切であるかわからない。

雨粒の大きさを吸取紙で調べるなどは、いわば昔風な観測法である。

《A》もつと近代的な方法としては、雨粒の落ちているのを瞬間的に写真にとればよい、そうすれば大きさもわかるし、形などもはつきりする。普通に人間の眼がぼんやりと見過ごしているのを写真はもつと鋭敏に印してくれる。《B》雨をただ直線的に降るものとのんきに見ているだけではいけない。何かしら大事なことだと察したなら、それを出来るだけ科学的に突きつめる近代的な方法を講ずることが大切なのである。この頃のはやり言葉でいえば、認識というのであるが、写真のレンズが歪んでいっていると、とんだまちがった認識を結果しないとも限らないから、それも十分に注意しなくてはならない。《C》

雨粒のようなものは直接に写真にとつてその形を見ることができなければならない。もつと小さいものになると、それができなくなる。《D》例えば物理学で取り扱う放射性物質からの放射線のようなものである。これらも雨粒を吸取紙で受けとるように、何かの物質に当ててその作用で調べることはできるが、これではとちゅうの有様がわからない。そこで、7 ウイルソン霧箱というものをつかつて巧妙な方法でその途筋を写真にとると、とちゅうの通路がはつきりわかる。ウイルスン霧箱というのは、物理学の書物を見れば説明してあるが、つまり水蒸気を「注2」過飽和にする一種のソウチで、そのなかへ放射線を通すと、それが通過した場所にはイオンが出来、その周りに水蒸気が凝結して水粒となるから、これを写真にとると放射線の通路が示されるのである。ちようど雨粒を糸につらねたかっこうでこれも「注3」あなたがち雨粒の話と縁がないとはいわれない。

このウイルスン霧箱の方法というのは、説明を聞けば何でもないが、《b》巧妙なものだといわなくてはならない。放射線をつくっているα粒子だとか電子だとかは、どんなに小さなものであるかは、物理学ではつきりわかっている。そんな眼に見えぬ小さなものの通路を写真に見せるなどということは実に驚くべきことだと思われる。そこで普通にはとても正体のわからないと考えられる事柄でも、何かの工夫をして《c》その輪かくをでも明らかにすることが、このウイルスン霧箱のように出来たなら、実にすばらしい事ではあるまいか。

雨粒を見ながら私はこんな事をいろいろ考えていた。このごろのうちに世間の人心が何かしら不安に襲われているときに、衝撃につき当たるまでぼんやり待っているというだけでは、まことに心細いものである。



それから今ではこの学校にも試験があつて、試験まぎわになると、
 学生が頻りに頭をなやますのであるが、これもちょうど雨粒の大きさを
 吸取紙ににじませるようなもので、そんな事をしないで、ふだんか
 ら何かもう少し賢明な方法で学力をしらべるようにするのが近代的
 な教育であると思ふ。⁸雨粒の身になつてみれば、足もとに吸取
 紙が見えてから急に騒ぎ出したつて、⁹本当に眼のある人から見られ
 たら、それはいかにもおろかな仕業にうつるであらう。

【注】

- 1 大いさ・・・大きさ
- 2 過飽和・・・通常よりも蒸気が満ちている状態。
- 3 あながち・・・かならずしも

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 ¹ものしずかに雨の音を聞いていると、いろいろな記憶が心のなかによみがえつてくるのも ²とありますが、³ものしずかに ⁴がかかっている部分を次のア～オから一つ選び記号で答えなさい。

ものしずかに ア雨の音を イ聞いていると、ウいろいろな記憶が エ心のなかに オよみがえつてくるのも

問三 ²ところで、ちよつと見方を変えて、雨というのはたくさんの水粒が空から生まれて、地上に落ちて来るものだと思ふ出すと、あたかもそれらが人間の運命を象徴しているようにも思われる ³とありますが、ここでは筆者は何を何のようだと考えているのですか。次の①②に入るように、本文中の言葉をぬき出して答えなさい。

① を ② のようだと考えている。

問四 ³これと似ている ⁴とありますが、

(1) 「これ」の内容を表している部分をここより前からぬき出し、次の□□□□□に入るように、はじめとおわりの五字を答えなさい。

□□□□□、□□□□□ということ

(2) どのような点が「似ている」のですか。次の□□□□□に入るように、自分の言葉で三十五字前後で説明しなさい。

□□□□□という点。

問五 空らん「a」「c」にあてはまる言葉をそれぞれ次のア～オから選び記号で答えなさい。記号は一度しか使えません。

ア まるで イ せめて ウ いかにも エ たとえ オ しきりに

問六 ⁴人間の通性 ⁵とありますが、「通性」とはどういう意味ですか。次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 人間がするようにさせられている習慣。 イ 人間の代々受けついできている習慣。
 ウ 人間のだれもが共通に持っている性質。 エ 人間が生まれつき持っている性質。

問七 ⁵事の起こらない先にその赴くところをはつきりと見究めること ⁶の具体例としてもつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 練習をなまけていると、試合に勝てないと思ふこと。 イ 夏休みは長いからのんびりしてもだいじょうぶだと思ふこと。
 ウ 姉が見ている時に姉の日記を読んでも平気だと思ふこと。 エ 習い事があつても学校ですつと遊んでいようと思ふこと。



問八 次の一文をいれるのは、本文中の空らん《A》《B》《C》《D》のどこがもっともふさわしいですか。一つ選んで記号で答えなさい。

つまり何事に対しても、表面的な感覚的観察に終わらせることなしに、もっと科学的な方法をそこに利用することが必要なのではないか。

問九 6 講ずる の、ここでの意味と同じものを、次のア～エから一つ選記号で答えなさい。

- ア 調べて発見する イ 用意して説明する ウ 順序立ててならべる エ 考えて実行する

問十 7 ウイルソン霧箱 を使つての実験の手順を、次のア～エの中から必要なものを五つ選び、正しい順番に並びかえなさい。

- ア 放射線を箱に通す。
イ 箱の中で水蒸気を過飽和にする。
ウ 箱の中にイオンが生じる。
エ 水粒を写真にとる。
オ イオンの通り道をつくる。
カ イオンのまわりに水蒸気がつく。
キ 雨粒を水蒸気にする。

問十一 8 雨粒の身 とありますが、これは何のたとえですか。本文中の言葉で答えなさい。

問十二 9 本心に眼のある人から見られたら、それはいかにもおろかな仕業にうつるであろう について、

(1) 「眼のある人」とはどういう人のことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エから一つ選記号で答えなさい。

- ア 成績が良くて知識が豊富な人 イ 経験が豊かで人々から信らいされる人
ウ 観察力があり物事の本質を見ぬく人 エ 想像力があり他人の気持ちに共感できる人

(2) 「おろかな仕業」とは、なぜ「おろか」だと筆者は言っているのですか。説明しなさい。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十一(2)以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問十一(2)の答えは、国語六の解答らん(三)に書きなさい。字数の指定のある問題は、句読点も一字と数えます。

1 ふりあおぐと、山が淡く色づいていました。すつと空へ背をのばすように幹が立ち、やわらかな緑がかつた枝に白く、またほのかな紅色に花が咲きにぎわっています。

あれは、山桜。

花のあとに葉をしげらせる染井吉野と異なり、山桜は葉の芽を枝々につけつつ花を咲かせます。しかも、あたりの山桜がいつせいに咲くというより、同じ場所に生えている木々でも少しずつ開花の時期がずれて、あちらで咲き、こちらでまた咲き、と2 ゆるやかに花の盛りを過ぎます。

山のふもとでは田植えにソナエ、田に水が張られるころでしょうか。朝、まだ静かなその水面には、向こうの山々の姿が映ります。3 山に咲く花も、田水の上にかびます。

古い民間信仰では、山の神は先祖でもあり、田の神でもあると信じられてきたそうです。春、山からおりてきて、もみまきを見守り、ぶじ苗が育ち、田植えが済み、夏を過ぎ、秋に稲穂がゆたかに実るまで田の一年を見届けて、それからまた山へ帰っていく神さま。

そんな田の神が現れる兆しとして、4 春には山々が山桜に染まると信じられていました。

早乙女(田植えする女性)や早苗(田に植えるころの苗)、皐月(旧暦五月)など、田にまつわるものに「さ」がつくのは、それが田の神を表すからともいわれます。さくらという名前も「さ」は神さまのこと。その神さまが「くら」(座)に坐して山を染めるから、さくらというとする説があるくらい、実りへの祈りと結びついた花でした。

桜を詠う歌が『万葉集』には少なかつたのが『古今和歌集』のころから、花といえば桜を意味するほど増えていきます。それは『万葉集』の時代には、中国伝来の梅を愛する宮廷文化が盛んで、桜を觀賞するようになるのはもう少し5 時代が「」から、と説明されもします。ですがそうではなく、むしろ桜は、見事に咲いたら今年は豊作、早く散ったら凶作などと占われたほど稲作にまつわる信仰の花だったために、歌を詠もうという気持ちが起きなかつたのではないかともいわれます。

桜は山の花であり、梅は里の花であり。いずれも日本の文化に深く根



ざしたかけがえない花なのは確かなことです。それでいて、山に咲き、祈りの対象となった桜と、人に植えられ、実が薬にも食事にも役立つ梅とは、⁶ そもそも花と向かい合うときの心の持ちようがちがったのか もしれません。

野を開墾し、森を田へと切りひらいていったのが稲作の歴史なら、あちらはせいれいたちの棲む神聖なリョウキだからと、山をおそれ敬う気持ちの名残りが、山桜をながめるときにもあったでしょうか、土の、草木の、水の、太陽の光の、さまざまな自然の恵みあってこそ、田畑に実りがもたらされることに感謝しながら。

山峽に咲ける桜をただひと目君に見せてばなにをか思はむ

【注1】 大伴池主

山あいに咲く桜をただひと目でもあなたに見せることができれば、それ以上なにを思うことがあるでしょう、と大伴池主が、親しい間柄にある病床の^{【注2】} 大伴家持に贈った歌です。⁷ 花を手向けるように差し出された歌には、桜への祈りが織り重ねられているようです、ひと目見せたいと願って詠むことで、あたかも桜を届ける」。

さくら まど・みちお

さくらの つばみが
ふくらんできた

とおもっているうちに
もう まんかいに なっている
きれいだなあ
きれいだなあ

とおもっているうちに
もう ちりつくしてしまう

⁸ まいねんのことだけれど

また おもう

いちどでも いい

ほめてあげられたらなあ…と

さくらの いっぱい

さくらに そのまんかいを…

⁹ 古来、人は恋する相手や親しい人に桜の歌をささげてきました。そんな^{【注3】} 言祝ぎの最たるものとは「さくらの ことばで さくらに そのまんかいを」¹⁰ 「ほめてあげられたらなあ…」と願うこの詩のように、花を思い、花そのものにささげる言葉なのかもしれません。

七十二候では三月の下旬、春分次候に「桜始めて開く」という季節がおとずれます。花見の桜が、山桜から染井吉野に変わり、山あいをながめる風情から桜の木の下で^{【注4】} 宴をする楽しみへと変わっても、過ぎゆく月日を数えながら、桜の季節を待ち遠しく思う心はいまもあります。

願はくは花のしたにて春死なむその如月の望月のころ 西行

あくがるる心はさても山桜散りなむのちや身にかへるべき 西行

願わくば、旧暦二月の満月のころ、桜の花の下で死にたいものと詠む心はまた、¹⁰ あこがれ過ぎて桜のもとへ行つたきり、花が散っても帰ってこられるものでしょうか、とも詠います。

散りぎわが美しいとされ、武家に尊ばれた桜は、咲くよろこびとは別に、散る美学とも結びつきました。散る花を惜しみ、散るはかなさにあわれを覚え、数々の歌が生まれます。

山々を色づかせる春の息吹のたかまりも、花の散るさまに表れる時の移ろいのはかなさも、ともに桜の姿です。

人は亡くなると山へ帰ると信じられ、最初の一年は^{【注5】} 喪に服しますが、そののちには祖先になり、山の神になり、田を見守りに訪れてくれるという、神でありながら身近な存在でした。としたら生と死とがとなり合い、親しく暮らす土地で、山に咲く山桜の花は、あれは祖父母、あれは父母、そして私の命もいつかは帰り、春になれば咲きにぎわう、そんな生命の営みのくり返し。

(白井明大「山桜と山の神」 『季節を知らせる花』より)

【注】

- 1 大伴池主 …… 奈良時代の歌人。
- 2 大伴家持 …… 奈良時代の歌人。池主のいとこ。
- 3 言祝ぎ …… 祝う気持ちをあらわす言葉。
- 4 宴 …… 食事をしたり酒を飲んだりする集まり。
- 5 喪に服する …… 人が死んだあと、家族がある期間家にこもって付き合いなどをひかえること。



問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 1 ふりあおぐと とありますが、この言葉から筆者は山のどこにいて考えられますか。次の□にあてはまる言葉を答えなさい。

山の□

問三 2 ゆるやかに花の盛りを過ぎます とはどういうことですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 花の見ごろがほかの桜よりも長いということ。
イ 満開になる時期がほかの桜よりおそいということ。
ウ 開花の時期がほかの桜よりも早いということ。
エ 一本の木で咲く花の数がほかの桜よりも多いということ。

問四 3 山に咲く花も、田水の上にうかびます とはどういうことですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 桜の花を見る人が想像すること。
イ 花びらが水の上に散っていること。
ウ 桜の花の姿が水に映ること。
エ 花びらが水の上を流れていくこと。

問五 兆し の意味としてもつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア お告げにさからう様子。
イ 前もつてお祝いをしている様子。
ウ 不安をやわらげる様子。
エ 何かが起こりそうな様子。

問六 4 春には山々が山桜に染まる とありますが、これは山々がどうなることですか。次の□に入るように、本文中の言葉を使って説明しなさい。

□ こと。

問七 5 時代が「□」から「□」の空らん「□」に入れるのもつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 上がって イ 下って ウ さかのぼって エ さかえて

問八 6 そもそも花と向かい合うときの心の持ちようがちがったのかもしれない とは、どのようにちがったのですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 桜は神聖な場所に咲く今年の稲のでき具合の良いことを祈る信仰の花であり、梅は人々の生活に結びついた身近な花として受け止められている花である、というちがい。
イ 桜はその名前が神様の名前をあらわすほど日本人の信仰に根ざした花であり、梅は中国の宮廷で大事にされた、日本人にとってはあこがれであった花である、というちがい。
ウ 桜は歌を詠むことをこわいと感じさせるほど身近でなく、葉にも食事にも役立たないが、梅は中国伝来の高貴な花であるのに人々の生活に役立っている花である、というちがい。
エ 桜は自然の恵みによって咲きほこる、人の手がおよばないからこそひと目見せたいと思わせる花であるが、梅は人の手によって植えられ、いつでも楽しむことのできる花である、というちがい。

問九 7 花を手向けるように差し出された歌には、桜への祈りが織り重ねられているようです。ひと目見せたいと願って詠むことで、あたかも桜を届ける「」の空らん「」にひらがな三字の言葉を入れなさい。

問十 8 まいねんのことだけれど また おもう いちどでもいい ほめてあげられたらなあ… とありますが、詩の作者がこのように思うのはなぜですか。十字前後で二つ答えなさい。

問十一 9 古来、人は恋する相手や親しい人に桜の歌をささげてきましたが、そんな言祝ぎの最たるものとは「さへらのことばでさへらにそのまんかいを」ほめてあげられたらなあ…と願うこの詩のように、花を思い、花そのものにささげる言葉なのかもしれません。について、
(1) この部分の内容を、大伴池主の歌を用いて説明しているのが次の文章です。へ へにあてはまる言葉を、池主の歌より後から十字でぬき出して答えなさい。

大伴池主が家持に贈った歌には、病床にあり今年の桜を見られないことを残念に思う家持の気持ちをくみとり、へ へにいる気持ちが入められています。

(2) (1)の大伴池主のように、あなたも大切に思う人の気持ちをくみ取って、その人に伝える言葉を作文しなさい。そのさいに、だれに、対して、どのような時に伝えたい言葉かがわかるように具体的な状況をいれること。左の解答らんに直接書きなさい。

問十二 10 あこがれ過ぎて桜のもとへ行つたきり とありますが、これは和歌の作者西行のどのような状態を言っていますか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 何かに動かされて心配しているうちに、一日が終わっている状態。
イ 何かを良いものだと思いいんで、そこからぬけ出せずにいる状態。
ウ 何かを自分の使命だと信じ、一生つらぬきたいと思っている状態。
エ 何かに夢中になって、そこからはなれられずとまどっている状態。

一

ハンケイ

セイミツ

承知

ソウチ

問一

問二

問三 ①

②

問四

(1)

3

ということ

(2)

35

という点。

問五

a

b

c

問六

問七

問八

問九

問十

↓

↓

↓

↓

問十一

問十二

(1)

(2)

二

ソナ

問一

え

リョウイキ

営

み

問二

問三

問四

問五

問六

こと。

問七

問八

問九

問十

10

10

問十一

(1)

ている気持ち・・・

問十二

(2) 答えは 国語一六 の解答らん に書きなさい。

